『駿遠へ移住した徳川家臣団』における岡田清直・岡田錠次郎の謎（その４）

The Re-examination on the brief history of OKADA Kiyonao/OKADA Jyojiro in MAEDA's book,vol.4

小栗 勝也*
Katsuya OGURI

（承前、「３．資料ごとの調査結果」の続き。注の番号も継承）

№62 の『浜松市史（史料編五）』（浜松市役所）は、筆者個人の蔵書があり、それで確認した。書誌情報を正しく記すと、『浜松市史　史料編五』（昭和 37 年 3 月 31 日、編集兼発行者・浜松市役所）である。同書の 360 頁に岡田清直の情報が記載されている。すなわち、明治 6 年 2 月に浜松県令から「学区取締」を任命した布達の中に、「岡田清直」の名がある。前出**№56** の『静岡県史　資料編 16　近現代一』の中にある③の資料＝学区取締の任命情報と同じものである。岡田錠次郎の情報は何もなかった。

№63 の『駿東郡沼津町誌』（昭和 55 年／昭和 55 復、沼津町役場）は、浜松市立中央図書館に蔵書があり、筆者はそこでこれを見た。書誌情報を正しく記すと、『駿東郡沼津町誌（沼津資料集成７）』（昭和 55 年 2 月 29 日、著者：沼津町役場、編輯･発行：沼津市立駿河図書館）となる。前田氏は第 2 編で「昭和五五年復」と記して「復」の文字を追加しているが、それは、この本が、大正時代に沼津町によってまとめられたものを飜刻して発行されたもの（本書冒頭の辻真澄「まえがき」より）だからであろう。ここには岡田清直・錠次郎の情報はなかった。

№64 の『沼津市誌』（昭和 36 年、沼津市役所）も、浜松市立中央図書館の蔵書を確認した。但し同館には、『沼津市誌』の名でヒットするものが、以下①～⑤の 5 種類がある。すなわち、①『沼津市誌　上巻』（昭和 36 年 3 月 30 日、編集・沼津市誌編集委員会、発行・沼津市）、②『沼津市誌　中巻』（昭和 36 年 3 月 10 日【上巻より先の発行･･･小栗注】、編集･発行は同上）、③『沼津市誌　下巻』（昭和 33 年 11 月 15 日【下巻が最初の発行･･･小栗注】、編集･発行は同上）、④『沼津市誌』（昭和 32 年 8 月 10 日、編輯・市誌編纂委員会、発行・沼津市）【藁半紙に印刷された薄い冊子で、表紙に「中間報告」、「資料集３」、また市長の序文に「市誌中間報告第三集」の文字がある･･･小栗注】、⑤『沼津市誌　全』（昭和 12 年 1 月 1 日、編著者・沼津市役所内沼津市郷土研究会、発行・蘭契社書店）、の 5 冊である。

前田氏の本では、沼津市役所の発行または編集と読める記載の仕方であるが、実物では沼津市はあっても沼津市役所のものは存在しない。氏が、市と市役所を同一と見なしたと想像され、正確でないことに変わりはないが、ここではこれ以上に追及しないこととする。前田氏が記す残りの情報、すなわち沼津市誌と昭和 36 年の情報を共に満たすものは①と②の２つのみである。従って、他は無視してもよいのだが、筆者は 5 種類の『沼津市誌』を全て見た。

その結果、①の 618 頁に、沼津市の裁判所で大正 8 年 6 月から「監督判事」を務めた岡田純次郎の名があること、また③の 40 頁、「沼津兵学校附属小学校役々（明治二年末調）」の中に「素読教授方」として「岡田隆三（香峰）」が、同じ③の 46 頁では「集成舎変則」に務めていた教師の中に「岡田正」があること、更に 50 頁では、この岡田正は沼津中の職員として記録されていることが分かった。加えて⑤では、市議会議長の岡田吾一（148 頁）、沼津兵学校の資業生であった岡田顕次郎（181 頁）と岡田鉦八郎（182 頁）、附属小学校の教員としての「岡田光峰」（214 頁）、素読方の「岡田隆三」（215 頁）、中学職員の岡田正（一等助教諭）（218 頁）、韮山代官の手代「岡田三郎」（408 頁）、の名を確認できる。5 種類の『沼津市誌』から判明する岡田姓の人物は以上であり、岡田清直・錠次郎の情報は何もなかった。

№65 の『群馬県史資料編二一』（群馬県史）（昭和 62 年史編纂委員会／昭和 62 年　同史編纂委員会）は、国立国会図書館デジタルコレクションの蔵書を同図書館内で見た。正確な書誌情報は『群馬県史　資料編 21　近代現代 5』（昭和 62 年 12 月 3 日、編集・群馬県史編さん委員会、発行・群馬県）である。同書に添付されている附表まで全て

2021 年 5 月 11 日受理
* 情報学部　情報デザイン学科

を見たが、岡田清直・錠次郎の情報はなかった。

No.66 の『城下町相良区史』（昭和 61 年、榛原郡相良町）は、袋井市立袋井図書館の蔵書を確認した。正確な書誌情報は、『城下町相良区史』（昭和 61 年 10 月 1 日、発行者・相良区区長八十宇三郎、編集者・川原崎次郎、発行所・城下町相良区史刊行会）である。ここにも岡田清直・錠次郎の情報はなかった。

No.67 の『千代田誌』（昭和 59 年、同編集委員会）は静岡大学附属図書館の蔵書を、静岡理工科大学附属図書館との相互貸借制度を利用して、理工大図書館に取り寄せてもらい、それで確認した。ここでいう「千代田」は、昭和 9 年に静岡市に吸収合併された「千代田村」のことを指す。その合併 50 周年を記念して作られたのが本書である。書誌情報を正確に記すと、『千代田誌』（昭和 59 年 10 月 1 日、編集・安本博、発行・千代田誌をつくる編集委員会）となる。

ここからは、巴川改修功労者頌徳碑の起工発起功労者の 1 人に「故岡田伊之助」があること（137 頁）、上足洗耕地整理組合の監督として「岡田光隆」があること（142 頁）、安倍郡会議員で入江町から選出された第 4 期の議員として「岡田大三」があること（325 頁）、静岡市との合併時の役職者でもある千代田村村会議員の「岡田辰三」があること（371 頁）、「岡田繁太郎之墓」の紹介があること（842 頁）、本書作成の賛助会員の中に「岡田新三郎」があること（1283 頁）は分かったが、岡田姓の人物に関する情報はこれで全てであり、岡田清直・錠次郎については何も記載がなかった。

No.68 の『神奈川県資料第八巻』（昭和 47 年、神奈川県立図書館）は、その名で存在する資料はなく、存在するものは『神奈川県史料』のみである。「資料」ではなく「史料」が正しい。筆者は、国立国会図書館デジタルコレクションのものを同館内で見た。正確な書誌情報を記すと、**『神奈川県史料　第八巻　附録部一』**（昭和 47 年 2 月 20 日、編集発行・神奈川県立図書館）である。タイトル中の「資」の 1 字のみは誤っているが、他は前田氏の記す通りである。

内容は官員履歴のみで構成された史料集で、その中には神奈川県士族の岡田利正（155 頁、340 頁）、神奈川県平民の岡田宗直（350 頁）、神奈川県士族の岡田正薫（745 頁）の 3 名の岡田姓があった。しかし、岡田清直・錠次郎の情報はなかった。

No.69 の『ある幕臣からみた明治維新　初代駅逓正杉浦譲』（昭和 52 年、高橋善七）は、前田氏は第 1 編では書誌情報をこのように記したが、第 2 編では**『初代駅逓正杉浦譲』（昭和 52 年、高橋善一）**としている。この本については、浜松市立城北図書館に蔵書があり、筆者はそこで確認した。正しい書誌情報は、**『初代駅逓正　杉浦譲　ある幕臣からみた明治維新』**【「初代」と「駅逓正」は分かち書き。駅逓正には「えきていのかみ」のルビあり･･･小栗注】（高橋善七、昭和 52 年 8 月 20 日、日本放送協会、NHK ブックス 293）である。第 1 編で前田氏が記したタイトルは正題と副題が逆になっている。また、著者は**高橋善七**が正しく、第 2 編で前田氏が記した善一は誤記である。同書には岡田清直・錠次郎の情報はなかった。

No.70 の『大久保一翁』（昭和 54 年、松岡英夫著）は袋井市立袋井図書館の蔵書を確認した。前田氏が記す書誌情報に誤りはないが、正確にはサブタイトルが付されており、松岡英夫『大久保一翁　最後の幕臣』（昭和 54 年 4 月 25 日初版、昭和 54 年 6 月 20 日再版、中公新書）と記すのが正しい。ここにも岡田清直・錠次郎の情報はなかった。

No.71 の『後は昔の記他』（昭和 45 年、林薫著）は、浜松市立城北図書館の蔵書で確認した。前田氏は林の名を「薫」と記したが、「董」（ただす）が正しい。城北図書館の蔵書から正確な書誌情報を記すと、**『後は昔の記他　林董回顧録』**（東洋文庫 173、校注者・由井正臣、発行・平凡社、1970 年 10 月 10 日初版第 1 刷、1987 年 1 月 20 日初版第 7 刷）となる。筆者が見たのは 1987 年の第 7 刷であるが、前田氏は 1970 年（昭和 45 年）の初刷を見たのであろう。ただし同じ「初版」であるから、内容は同一であるので第 7 刷のものでも問題はない。また、奥付では『後は昔の紀他』と記され、「紀」の文字が使われているが、本書の表紙その他の所ではすべて「記」が使われているので、奥付の方が誤植であると考えられる。この本には、いずれも林董による『林董伯自叙伝回顧録』（「林董伯」と「自叙伝」の文字は分かち書き…小栗注）と『後は昔の記』（2 重括弧は原文のまま…小栗注）、『日英同盟の真相』の 3 種の作品が収録されて 1 冊となっている。3 作品の全てを見たが、岡田清直・錠次郎の情報は何もなかった。

No.72 の『名ごりの夢』（今泉みね述）も浜松市立城北図書館の蔵書を見た。正しい書誌情報は、『名ごりの夢　蘭医桂川家に生れて』（東洋文庫 9、著者・今泉みね、昭和 38 年 12 月 10 日、平凡社）で、サブタイトルがある。この書にも岡田清直・錠次郎の情報はなかった。

No.73 の『江原素六』（昭和 60 年、辻真澄著）は掛川市立中央図書館の蔵書を確認した。前田氏が記す書誌情報は間違ってはいないが出版社の情報が欠けている。正確に記すと、辻真澄『江原素六』（昭和 60 年 1 月 15 日、英文堂書店）となる。さらに表紙の下部には「駿河新書」とあり、カバー裏側には「その第 1」の文字もある。同書にも岡田清直・錠次郎の情報はなかった。

№74 の『朝霧の覚』（昭和 10 年、池田忠一著）は、国立国会図書館デジタルコレクションで公開されており、筆者は WEB 上でそれを見た。前田氏は書名を『朝霧の覚』と記しているが、「霧」ではなく「露」であり、**『朝露の覚』**が正しい。その他の書誌情報も含めて正確に記すと、池田遵養軒著『朝露の覚』（池田忠一遺著、非売品、昭和 10 年 4 月 10 日、編纂兼発行人・池田宏、印刷所・中屋三間印刷㈱）となる。これは豊田･山名・磐田郡長などを務めた池田忠一の「自伝的遺稿」（『静岡県史　資料編 17』の「解説」1138 頁）であり、長男の宏（『朝露の覚』110 丁右）が編集・発行したものである。本書では岡田良一郎（岡田社長も含む）の名が多数散見され、岡田良平（岡田文相も含む）も幾つか見られる他、岡田理事官（地方局長、106 丁右）もあったが、岡田清直・錠次郎の情報は皆無であった。

№75 の『石坂周造研究』（昭和 52 年、前川周治著）は静岡県立中央図書館の蔵書を確認した。正確な書誌情報は、前川周治『石坂周造研究　―志士・石油人としての両半生―』（昭和52年1月【月までしか記されていない…小栗注】、三秀社）である。同書 93 頁に、「岡田周蔵（上州浪人で別名朽葉新吉）」が記されているが、岡田姓の人物の記述はこれのみで､岡田清直･錠次郎は何も記されていなかった。

№76 の『前島密自叙伝』（昭和 31 年、伝記刊行会）は富士市立中央図書館の蔵書を見た。奥付から正確な書誌情報を記すと、前島密『前島密　前島密自叙伝』（1997 年 6 月 25 日、日本図書センター）となり、日本図書センターによる｢人間の記録｣シリーズの第 21 巻として本書が刊行されている。但し、これは復刻版である。底本となったのは、前島密著『前島密自叙伝』（1956 年、前島密伝記刊行会）である（冒頭の「凡例」より）。前田氏は、復刻版ではなく原書を見たことになる。筆者は富士市立中央図書館の復刻版しか探せなかったので、それを見たが、中身は同じであるから今回の調査では問題はない。ここにも岡田清直・錠次郎の情報は何もなかった。

№77 の『福地桃痴』（昭和 40 年、柳田泉著）は、浜松市立城北図書館に蔵書があり、筆者はそこでこれを見た。但し、前田氏が書名として記した「桃痴」は誤記で、「桜痴」が正しい。正確な書誌情報は、**『福地桜痴』**（人物叢書 129、著・柳田泉、編集者・日本歴史学会、昭和 40 年 12 月 10 日、吉川弘文館）である。同書にも岡田清直・錠次郎の情報はなかった。

№78 の『平賀敏君伝』（昭和 6 年、同伝記編纂会）は沼津市立中央図書館の蔵書を確認した。実物の奥付には書名はないが、背文字と本文冒頭 1 行目に「平賀敏君傳」とある。奥付から分かることは、編纂兼発行代表者が三輪小十郎であること、平賀敏君伝記編纂会から昭和 6 年 12 月 14 日に発行されていることである。本文中に「私は」という主語で書かれている部分と、第３者的な書き方の部分が混在しているので、一部は自叙伝の原稿が含まれているのかもしれない。この書にも、岡田清直・錠次郎の情報は何もなかった。

なお本書の中に、平賀が紹介して岡田良一郎を福沢諭吉に引き合わせたとき、岡田が報徳の教えを広めたいという持論を述べると、福沢は仰向けに寝転んで膝を立てたまま、二ノ宮尊徳のような「そんな古臭い事」は言わずに、私の文明論を聞きなさい、と言われたという場面が紹介されている（87～88 頁）。本稿の目的とは関係ないが、当時の福沢が古い、新しい、の基準で単純化し、福沢の考える新しい文明論のみを重視していたことが伺えて、面白いと思った。

報徳思想は、日露戦争後の日本において、日本を豊かにする 1 つの手段として活用すべく、明治末から大正期に内務省が特に注目して取り上げ、中央報徳会を設置するなどして全国的な啓蒙運動が展開されたこともあった[(9)]。筆者も、日本に根付く良きものを大いに利用して構わないと考える 1 人であり、後に福沢もそれに近い立場になるのだが、当時の福沢は西洋文明を日本に移植する必要性を訴えることに必死な時代であったが故に、そのような態度を取ったのであろうか。「古臭い」の一言で報徳思想が排斥されては、岡田良一郎もさぞ面食らったに違いない。この時、岡田良一郎は福沢のことを「手に合はぬ人」だと否定的に評価したようである（同書 88 頁）が、岡田からすれば当然であろう。福沢の原理主義的かつ単純な態度は、未知の思想を日本人に定着させる為に当時においては有効であったのかもしれないが、同時にまた、無駄に敵を多くしていたようにも思う。福沢のことを悪く言う同時代人が多いのも致し方ないことであろう。

№79 の『坂本竜馬を斬った男今井信郎』（昭和 46 年、今井幸彦著）は、前田氏が見た昭和 46 年刊のものは見つけられなかったが、2009 年刊行の本を国立国会図書館で確認した。実物の本で確認した。同書の奥付から正確な書誌情報を記すと、今井幸彦『坂本龍馬を斬った男』（2009 年 12 月 12 日、新人物往来社《新人物文庫》）となる。但し、同書の表紙には副題が付いており、『坂本龍馬を斬った男　幕臣今井信郎の証言』とある。

同書中の説明によると、この本は元々、1971 年（昭和 46 年）に新人物往来社から刊行されたものが、更に昭和 58 年に同社から『坂本竜馬を斬った男』の題名で刊行され、その上に改題、再構成して 2009 年に文庫版として刊行されたものである。前田氏は最初の昭和 46 年刊行の本を見たことになるが、その時の書名は前田氏が記すように『坂本竜馬を斬った男今井信郎』であったのであろうか。最初の本を確認できないので、前田氏の記述が正しいか否

かは不明である。いずれにせよ、同じ出版社から3度に及ぶ改訂重版がなされたことになり、よく読まれた本であることが分かる。以上の経緯が分かっているので、筆者が見た国会図書館の本でも内容的には差はないと考えられる。この本にも岡田清直・錠次郎の情報は何もなかった。

№80の『海軍事始　肥田浜五郎の生涯』（昭和50年、土屋重朗著）は磐田市立中央図書館の蔵書を確認した。前田氏は何故か書名を書き間違えており、正しい書誌情報は、土屋重朗**『近代日本造船事始　―肥田浜五郎の生涯』**（昭和50年4月25日、新人物往来社）である。肥田は咸臨丸の機関長として、咸臨丸がアメリカに渡った時の航海に参加した人物である。この書にも、岡田清直・錠次郎の情報はなかった。

№81の『はままつ歴史発見』（昭和62年、神谷昌志著）は、浜松市立城北図書館の蔵書を見た。正確な書誌情報を記すと、『はままつ歴史発見』（神谷昌志、昭和62年8月22日、静岡新聞社）となる。同書144～145頁に岡田勘右衛門の名はあるが、岡田姓の人物はそれだけであり、岡田清直・錠次郎の情報はなかった。

№82の「山路愛山研究」（『静岡近代史研究』4号）は、磐田市立中央図書館に蔵書があり、筆者はそこでこれを見た。正しい書誌情報は、川崎司「山路愛山研究―第二の故郷　静岡―」（『静岡県近代史研究』第4号、静岡県近代史研究会発行、1980年10月10日）である。ここには岡田清直の情報が記されている。すなわち、高木壬太郎（後に青山学院院長となる）が、掛川の「岡田清直」の漢学塾で学んだ、とある（69頁）。しかし、前田氏の本では、岡田を紹介する項目の中で、岡田が掛川で塾を開いていた事実を記載することはなかった。前田氏は、岡田のことを記す際に、この文献に記されている情報を無視したか、記されていることに気付かなかったことになる。なお岡田錠次郎に関する情報は、ここにはなかった。

№83の『赤松則良半生記』（昭和52年、赤松範一編注）は、袋井市立袋井図書館の蔵書を確認した。奥付から正しい書誌情報を記すと、**『赤松則良半生談』**（東洋文庫 317）（1977年11月18日初版第1刷、1989年3月20日初版第7刷、編注者・赤松範一、平凡社）となる。前田氏が記す表題の末尾の文字「記」は誤りで、「談」が正しい。前田氏は昭和52年としか記していないので第1刷を見たことになるが、筆者が見た第7刷も同じ初版であるので、中身は同一である。同書252頁の関係人物略伝の中で「岡田井蔵」はあるが、他に岡田姓の人物はなく、岡田清直・錠次郎の情報はなかった。

№84の『幕末下級武士の記録』（昭和60年、山本政恒著）は、富士宮市立中央図書館の蔵書を見た。より詳しく書誌情報を記すと、山本政恒『幕末下級武士の記録』（校訂者・吉田常吉、昭和60年11月10日、時事通信社）となる。ここにも岡田清直・錠次郎の情報はなかった。

№85の『静岡県近代史研究』十五、十六号（静岡県近代史研究会）は、磐田市立中央図書館の蔵書を確認した。同誌第15号は1989年10月、第16号は1990年10月の発行である。ここにも岡田清直の情報があった。すなわち、第15号所収の川崎司「高木壬太郎と『呉山一峰』」の中で、高木が「遠州掛川村の漢儒（蘭学者とも）・岡田清直の家塾」で学んだことが記されている（182頁）。上述の**№82**の時と同様に、前田氏はここから岡田清直の情報を引き出して、自身の本の中で紹介することはなかった。第15号、16号の全部の中で、岡田清直に関する記述はこれのみで、他は岡田錠次郎も含め情報は何もなかった。

№86の『静岡県郷土研究』（静岡県郷土研究会）は、袋井市立袋井図書館および浜松市立中央図書館に蔵書があり、筆者は2箇所でこれを見た。前田氏は『静岡県郷土研究』と記すのみで、そのうちのどれを見たかは記していない。従って全部が対象であると判断し、全てを確認した。

『静岡県郷土研究』は第1輯が昭和8年に、最後の第20輯は昭和18年に刊行されており、今日では合本化された復刻版として、それを見ることができる。筆者も復刻版を見た。復刻版の書誌情報を記すと、『静岡県郷土研究』（編者・静岡県郷土**研究協会**、発行・国書刊行会、昭和57年5月30日、全8巻）で、全巻とも発行日は同じである。前田氏は原本の発行母体を「研究会」と記しているが、「研究協会」が正しい。

ここからは岡田姓の人物として、以下①～⑪の情報を抽出できる。①復刻版の合本第2巻所収の第3輯202頁（頁は合本の頁、以下同じ）に記載がある沼津兵学校附属小学校の「初代正則末期又は変則学出身者氏名」の中に「岡田志摩吉」の名がある。②同2巻所収の第4輯の442頁に、明治5年の整理後の浜松県官吏として少属の岡田治興、及び権少属の岡田良一郎の名がある。③合本第3巻所収の第5輯の232頁に、清水市入江尋常高等小学校校長として「岡田忠雄」の名がある。④同3巻所収第6輯の492頁に「三州吉田駅御油駅」の人で、「書　狂歌　號香雪園　岡田米次郎」の名がある。⑤合本第4巻所収の第7輯に、地租改正に関連して岡田良一郎の名が複数記されている。⑥同4巻所収の第8輯の273頁に、韮山代官江川氏直営の鋳造場の従事者で代官所附属職員の「岡田三郎」の名があり、この岡田は後に「君沢田方郡長岡田正臣」になっていることも分かる。⑦合本第5巻所収の第9輯で、沼津兵学校の資業生（第3期）として「岡田顕次郎」（83頁）が、同第4期として「岡田鉦八郎（正）」（84頁）がいたこと、更に沼津兵学校附属小学校役々」の中に「素読教授方」として

「岡田隆三（香峰と號す）」（97 頁）がいたことが分かる。⑧合本第 6 巻所収の第 12 輯に、遠州報国隊の留守部の 1 人として「岡田土佐（岡田美都衛）」の名があることが分かる。⑨同 6 巻所収第 14 輯の 535～536 頁には、掛川の「岡田與八」に学んだ「斉藤先生」の墓石の記録がある。また、⑩合本第 7 巻所収の第 16 輯で、「敬身舎」の定期試験人名表に「岡田萬吉」（236 頁）、「岡田常次郎」（237 頁）の名があり、更に、静岡県の報徳事業を紹介する記事（269 頁以下）の中で掛川・岡田家の人物が幾度も登場している。⑪合本第 8 巻所収第 19 輯の 225 頁に、東海人物誌の中に「掛川駅」の「算術　倉真　岡田十平」があることが紹介されている。

岡田姓の人物に関する情報は以上であり、岡田清直・錠次郎に関するものはなかった。

№87 の「山田大夢」（地方史静岡６号）は、磐田市立中央図書館に蔵書があり、筆者はそこでこれを見た。正しい書誌情報は、市原正惠「山田大夢「戊辰後経歴」―駿州移住一士族の記録―」（『地方史静岡』第 6 号、昭和 51 年 11 月、静岡県立中央図書館編・発行）となる。ここにも岡田清直・錠次郎の情報は何もなかった。

№88 の『転向明治維新と幕臣』（昭和 44 年、しまねきよし著）は、静岡県立中央図書館の蔵書を確認した。正しい書誌情報は、**しまね・きよし『転向―明治維新と幕臣』**（1969 年 2 月 15 日、三一書房、三一新書 642）である。著者名に「・」が、書名に「―」（ダッシュ）が入る。この書に岡田清直・錠次郎の情報は何も記されていなかった。

№89 の『日本海軍お雇い外国人』（昭和 63 年、篠原宏著）は、浜松市立城北図書館の蔵書を見た。書誌情報を詳しく記すと、『日本海軍お雇い外国人　幕末から日露戦争まで』（篠原宏、中央公論社（中公新書）、昭和 63 年 9 月 25 日）となる。岡田清直・錠次郎の情報は何もなかった。

№90 の『幕末おろしゃ留学生』（平成 3 年、宮永孝著）も浜松市立城北図書館に蔵書を確認した。正しい書誌情報は、**『幕末おろしや留学生』**（宮永孝《法大教授》、1991 年 1 月 30 日、筑摩書房）である。ここにも岡田清直・錠次郎の情報はなかった。

№91 の『江戸幕府役職集成（増補版）』（平成 2 年、笹間良彦著）は、筆者の個人蔵書で確認した。筆者の手元にあるものは、笹間良彦『江戸幕府役職集成（増補版）』（昭和 40 年 6 月 20 日初版、平成 2 年 5 月 20 日 12 版、雄山閣出版）で、前田氏が見たものと同一のものである。

なお、前田氏の本の第 2 編・巻末資料では資料名が「修成」とされていたが、それは誤記で「集成」が正しい。また、同じ第 2 編には、同じ資料名で増補版よりも前のものも記されており、筆者はそれを後の**№103** としてリストアップした。増補版より前のものは、増補版よりも情報量が劣ることを意味するので、実質上、増補版を見れば増補版よりも前の情報も確認したことと同じになる。従って、**№103** の所では特に解説をせず、ここでまとめて記すことにする。

なお、浜松市立中央図書館にも『江戸幕府役職集成』が所蔵されており、筆者はそこでも見たが、それには「増補版」の文字はなく「新装版」とだけ記されていた。同図書館の蔵書について書誌情報を奥付から記すと、笹間良彦『江戸幕府役職集成』（1999 年 11 月 5 日、新装版、雄山閣出版）となる。1999 年は平成 11 年で、前田氏が見た平成 2 年版よりも後の版になる。1999 年版の奥付から更に詳しく記すと、初版が昭和 40 年に刊行されたことは同様に記されており、以後、平成 9 年に第 17 版まで改版されたことまでが分かる。浜松市立中央図書館の「新装版」は 1991 年（平成 11 年）の発行であるが、どうやら平成 2 年から平成 11 年に至るどこかの時点で、「増補版」から「新装版」に呼び名が変更されたようである。本書の変遷を限なく記すことが本稿の目的ではないので、その変更がいつ行われたのかまでは追及しなかったが、新しい版になると「増補版」の文字が消えている事実と、かつては「増補版」が存在した事実をここに記しておきたい。

この資料には平成 2 年の増補版でも、平成 11 年の新装版でも、いずれも岡田清直・錠次郎の情報はなかった。

№92 の『山中庄治日記』（昭和 49 年、沼津市立駿府図書館）は、掛川市立中央図書館の蔵書を確認した。正しい書誌情報は、『山中庄治日記　―沼津勤番組の記録―』（昭和 49 年 2 月 28 日、沼津市立**駿河**図書館）である。サブタイトルが付いているほか、発行者名の「駿府」は「駿河」が正しい。著者編者の名はないが、発刊のことばを同図書館館長の辻真澄（「辻」は 1 点しんにょうが正しいが、ワードで表示できないため、これで代替した）が、解説を四方一泝が書いている。ここにも岡田清直・錠次郎の情報はなかった。

№93 の「旧幕臣中野悟一」（『静岡県近代史研究』9 号）は、磐田市立中央図書館に蔵書があり、筆者はそこでこれを見た。この文献の正確な書誌情報を記すと、平野日出雄「旧幕臣中野**梧一**の波乱の生涯」（『静岡県近代史研究』第 9 号、1983 年 10 月）となる。中野の名は、前田氏が記す「悟」は間違いで、「梧」が正しい。ここにも岡田清直・錠次郎の情報はなかった。

№94 の『浜岡人物誌　佐倉・比木編』（昭和 62 年、同編集委員会）は、袋井市立袋井図書館の蔵書を確認した。書誌情報を詳しく記すと、『浜岡人物誌　佐倉・比木編』（昭和 62 年 3 月 18 日、編集・浜岡人物誌佐倉・比木編編

集委員会《代表　博林勝太郎》、発行「浜岡町立浜岡東小学校内　浜岡人物誌佐倉・比木編　編修委員会事務局」、印刷・静岡教育出版社）となる。本書には岡田清直・錠次郎の情報は何もなかった。

No.95 の『関口隆吉の生涯』（昭和 58 年、八木繁樹著／八木茂樹著）は掛川市立中央図書館の蔵書を見た。正しい書誌情報は、**八木繁樹**『関口隆吉の生涯』（1983 年 8 月 20 日、緑蔭書房）で、前田氏が第 2 編で記した著者名＝八木「茂樹」は誤記である。岡田清直・錠次郎の情報は何もなかった。

No.96 の『山岡鉄舟の一生』（昭和 42 年、牛山栄治著／牛山英治著）は、国立国会図書館デジタルコレクションの蔵書を同館内で見た。正しい書誌情報は、牛山**栄治**『山岡鉄舟の一生』（昭和 42 年 10 月 5 日初版発行、昭和 43 年 2 月 11 日訂正再版発行、春風館）である。著者名は前田氏が第 2 編で記した「英治」は間違いである。また発行所の春風館の住所には「牛山方」とあるので、私家版の可能性が高い。この本にも岡田清直・錠次郎の情報はなかった。

No.97 の『勝海舟の参謀　藤沢志摩守』（昭和 49 年、安西愈著）は、富士市立中央図書館の蔵書を確認した。前田氏が記す書誌情報に誤りはないが、奥付の情報からより詳しく記すと、安西愈『勝海舟の参謀　―藤沢志摩守』（昭和 49 年 7 月 20 日、新人物往来社）となる。但し、表紙には題名の中に「―」（ダッシュ）はないので、前田氏が記したように記しても間違いではない。ここにも岡田清直・錠次郎の情報はなかった。

No.98 の『徳川慶喜公伝』（昭和 43 年、渋沢栄一著）は、袋井市立中央図書館の蔵書を見た。但し、同図書館で筆者が見たものは、平凡社の東洋文庫全 4 巻である。渋沢栄一による『徳川慶喜公伝』は、元は大正期に刊行された全 8 巻（本伝 4 冊、附録 3 冊、索引 1 冊）のものであるが、東洋文庫版では、そのうち本伝 4 冊分のみが文庫本として刊行された（東洋文庫第 1 巻中の「解説」301 頁）。

東洋文庫版 4 冊の書誌情報を記すと以下のようになる。『徳川慶喜公伝 1（全 4 巻）』（東洋文庫 88、1967 年 4 月 10 日初版第 1 刷、1989 年 2 月 28 日初版第 13 刷、渋沢栄一、平凡社）、『徳川慶喜公伝 2（全 4 巻）』（東洋文庫 95、1967 年 7 月 10 日初版第 1 刷、1989 年 2 月 28 日初版第 12 刷。以下、著者の渋沢栄一は同じなので略す）、『徳川慶喜公伝 3（全 4 巻）』（東洋文庫 98、1967 年 9 月 10 日初版第 1 刷、1989 年 2 月 28 日第 12 刷）、『徳川慶喜公伝 4（全 4 巻）』（東洋文庫 107、1968 年 1 月 10 日初版第 1 刷、1989 年 2 月 28 日第 11 刷）。

前田氏は、昭和 43 年刊行のものを用いたと記しているが、東洋文庫版で昭和 43 年（1968 年）に初めて刊行されたものは第 4 巻のみである。同じ年に増刷された 1～3 巻があったと仮定して、それを用いたのであれば、全 4 冊について「昭和 43 年」とのみ記すのは合理的であるが、同年に増刷があったという仮定が正しいか否かは分からない。いずれにしても、昭和 43 年と記していることから、前田氏が用いたのは東洋文庫版の方であって、間違っても大正期の原本でないことは確実である。

筆者は東洋文庫版全 4 巻の全てを見た。そこには岡田清直・錠次郎の情報は何もなかった。

No.99 の『大森鐘一』（昭和 5 年、池田宏編）は、静岡県立中央図書館の蔵書を確認した。書誌情報をより正確に記すと、『大森鐘一』（昭和 5 年 3 月 3 日、昭和 6 年 8 月 10 日再版、編纂兼発行者・池田宏、非売品）である。なお池田は「故大森男爵事歴編纂会代表者」である。ここにも岡田清直・錠次郎の情報はなかった。

No.100 の『史料からみた勝海舟』（昭和 49 年、田村栄太郎著）は、富士宮市立中央図書館の蔵書を見た。より正確な書誌情報を記すと、田村栄太郎『史料からみた勝海舟』（昭和 49 年 4 月 15 日、雄山閣）となる。同書 115 頁に軍艦奉行の岡田雄次郎の名はあったが、他に岡田姓の人物はなく、岡田清直・錠次郎の情報はなかった。

No.101 の『父渋沢栄一』（昭和 34 年、渋沢秀雄著）は、国立国会図書館デジタルコレクションの蔵書を同館内で確認した。但し、同書は上下 2 巻の書であるが、いずれも発行年が同じで、前田氏は上下の文字を記していないので、2 巻とも見たものと解釈して、筆者も両方を見た。正確な書誌情報を記すと、渋沢秀雄『**父　渋沢栄一**（上巻）』（昭和 34 年 3 月 18 日、実業之日本社）、渋沢秀雄『父　渋沢栄一（下巻）』（昭和 34 年 4 月 15 日、実業之日本社）となる。ここにも岡田清直・錠次郎の情報はなかった。

No.102 の『江戸幕府勘定所史料』（勘定所）（昭和 61 年、吉川弘文館）は、静岡理工科大学附属図書館が他の図書館との間で締結している相互貸借サービスの制度を利用して、和歌山大学附属図書館の蔵書を借り受けてもらい、それで確認した。奥付から正確な書誌情報を記すと、村上直・馬場憲一編『江戸幕府勘定所史料　―会計便覧―』（昭和 61 年 2 月 25 日、吉川弘文館）である。同書中に勘定奉行の「御勝手方」以下、各役職者の名が多数列記されている部分があり、そこには何人もの岡田姓の人物はあったが、岡田清直・錠次郎の名はなかった。その他、本書全部を見ても同様であった。

No.103 の『江戸幕府役職集成』（昭和 62 年、雄山閣出版）については、前出**No.91** の所に記してあるので、それを参照のこと。

No.104 の『江戸幕府旗本人名事典』（平成 2 年、原書房）は、浜松市立中央図書館の蔵書を確認した。この書は第 1～4 巻までと別巻を合わせた 5 巻で構成されている。書誌情報のうち、石井良助･監修、小川恭一・編著、原書房･発行は全てに共通で、異なるのは発行時期のみである。第 1 巻が 1989 年（平成元年）6 月 30 日、第 2 巻が同年 8 月 30 日、第 3 巻が同年 10 月 30 日、第 4 巻が同年 12 月 12 日、別巻が 1990 年（平成 2 年）5 月 30 日である。前田氏が記す発行年は平成 2 年なので、別巻のみを見たことになる。しかし、そこで出来ることは総索引で個人を探すことであり、肝心の個人の情報は第 1 巻以下によらねばならないから、平成 2 年とだけ記すのは現実性に欠けており、不正確な記録だと思われる。そこで筆者は 5 冊全てを見た。

第 1 巻には「あ行」から「か行」までの人名が収録されており、そこに岡田伊織善一から岡田竜蔵善隣（377～384 頁）まで多数の岡田姓の人物が紹介されている。また第 4 巻にも、岡田栄助から岡田栄助(同姓同名の別人物）まで(127～128 頁）何人もの岡田姓の人物が記され、更に別巻では上記と同じ岡田姓の人物が全て索引に登場している(225 頁)。以上の全てにおいて、岡田清直･錠次郎の名はなかった。

No.105 の『牧の原開墾の曙覚書』（平成 2 年、榛葉禮一著）は、静岡理工科大学附属図書館の相互貸借制度を利用して、静岡県立中央図書館の蔵書を借り受け、それを確認した。同書の表紙には「記録に見る／**牧之原**開墾の曙覚書」(「／」は改行を意味し、小栗が付したもの）と記されており、前田氏が記す表記と若干異なるが、奥付では前田氏が記す書名に似た「牧之原開墾の曙　覚書」と記されている。表紙と奥付にある書名で前田氏の記録と異なるのは、前田氏が記す「の」ではなく「之」が使われている点である。正しい書名の文字は「牧之原」である。また、表紙にある「記録に見る」は奥付にはないので、これを付けても付けなくても、どちらの題名も正しいことになる。ちなみに静岡県立中央図書館の登録情報には、「記録に見る」の文字も付されている。題名以外の書誌情報としては、著者・榛葉禮一、平成 2 年 9 月 28 日発行を加える程度である。出版社の記載はなく、編集発行者が田中工房、印刷が掛川採光堂と記されているのみなので、私家版と思われる。ここには岡田清直･錠次郎の情報は何もなかった。

No.106 の東京府史料ほか各県史料（国立公文所館所蔵）については、**No.129** の**神奈川県史料ほか各県史料（国立公文書館）**とも関連しているので、ここにまとめて記しておきたい。前田氏は国立公文書館（公文「所」館や公文所「舘」と前田氏は記しているが「**公文書館**」が正しい）で各県の史料を見たことが、ここから分かるが、具体的に記しているのは東京府史料と神奈川県史料の名だけである。それ以外については、その「ほか」の「各県史料」と記していて、どの県のものであるかが特定されていないので、全県が対象に含まれ得ることになる。このような書き方は、書く時には楽な方法ではあるが、具体性に欠くので証拠の出典を示す方法としては不適切である。後に再調査をしようとする人間を苦しめることにもなる。全てを対象にした再調査は不可能なので、候補を絞ることにした。真っ先に行うべきは、岡田の情報が含まれる可能性が最も高い静岡県の史料である。

国立公文書館のホームページから「所蔵資料」の検索をしようとすると「国立公文書館デジタルアーカイブ」のページに移行し、そこから検索が可能となっている。そこから「静岡県史料」を検索すると 1 件が該当し、更にその結果から「件名一覧」を選ぶと、「件名･細目一覧」として 56 件が表示される。最初の 1 件目は「県治紀事本末 1（明治元-7 年)」であり、最後の 56 件目は「修史館稿本（明治 8-13 年)」である。すべて WEB 上で公開されているが膨大な分量である。それでも筆者は全てを確認した。いずれも手書きの文書である。

その結果、上の詳しい検索結果 56 件の中で 12 件目に表示される「県治紀事本末　遠江国之部 3（明治 4-7)」の中にある「当県貫属御国内修行人名」の「横須賀組」の中に、「静岡県留学支那学／自費」(「／」は小栗が付したもので改行を意味する）の 1 人として「錠次郎倅」の「岡田鎌太郎」の名が記されていること【これを①とする】、また同じ 12 件目の史料中にある明治 6 年 9 月 2 日付けの「申達」で、「学資金寄附者」への「章典」が列記されている中に、「金拾二円七拾五銭」を「掛川学校」に寄附した「第三大区長」の「岡田清直」があり、彼に「木盃」が授けられたという記録があること【これを②とする】が分かった。さらに、14 件目の「県治紀事本末　遠江国之部 5（明治 4-7)」の中には、明治 6 年 8 月 27 日付けで「岡田清直」が「浜松県権少属」に任ぜられ、7 年 2 月 27 日付けで「免本官」になったことを記す履歴記録があった【これを③とする】。岡田清直に関する情報は以上であり、岡田錠次郎に関する情報は何もなかった。

ところで以上の①、③の情報は、筆者にとって既知のもので、本稿でも紹介済みの情報であるが、それもそのはずである。この国立公文書館の静岡県史料は、後に『明治初期静岡県史料』（前出**No.57**）が刊行された際に底本とされたものなのである(『明治初期静岡県史料　第一巻』1 頁の「序」を参照)。従って上記①の情報は、**No.57** の所で紹介した（２）の情報と同一であり、また③の情報は**No.57** の所で紹介した（１）の情報と同じである。②については **No.57** の所で紹介できなかったので、筆者がそれを調べている時に見落としたか、**No.57** の史料では記載が省かれたかのいずれかしかない。恐らくは筆者の見落としであろう。なお、②の資料的価値については、**No.55** の所で述べているので、そちらを参照頂きたい。

静岡県史料の次に、前田氏が名を明記している府県の史料を調べることにした。「ほか各県」の書き方では何も特定はできないが、前田氏が県名を明記したものについては、氏は確実に見ているはずだからである。

そのうち「神奈川県史料」について、静岡県の場合と同様の手順で検索したところ、全64件の件名・細目一覧が表示された。1件目が「神奈川県史　制度部　職制・禄制・禁令・規則（明治8-10年）」で、最後の64件目が「雑綴」である。静岡県の分だけで筆者は調査に疲れ果てていたので、ここでは悉皆調査は断念し、代わりに情報が得られ易そうな「履歴」の情報が件名に含まれているものだけを見ることにした。神奈川県史の場合、詳細結果の14件目として表示される「神奈川県史　附録　官員履歴1（明治元-11年）」から18件目の「神奈川県史　附録　官員履歴（明治11-17年）」までの連続5件の史料、及び63件目の「神奈川県史　附録（旧足柄県合併之部）　官員履歴（明治元-9年）」の合計6件がそれに該当する。これらもWEB上で全て見ることができるので、それで調べた結果、岡田清直・錠次郎に関する情報は何も見出せなかった。

次に、「東京府史料」について、同様に検索すると51件がヒットした。このうち1件目のものは「東京府史料」全体が1件として登録されている情報のことで、そこにある「件名一覧」を更にクリックすると、最初に表示された51件中の2件目以降から始まる50件が表示されるのみである。従って、実質的には、この50件が「東京府史料」ということになる。それでも量が多いので、ここでも悉皆調査は断念し、件名に「履歴」の文字が含まれているもののみに限定することにした。すると、51件で表示される結果の中の42件目の「東京府史料　附録之部　履歴1（明治元-8年）」から45件目の「東京府史料　附録之部　履歴4（明治元-8年）」までの連続した4件に限定される。これらも全てWEB上で調査したが、岡田清直・錠次郎に関する情報は何もなかった。

岡田清直・錠次郎は明治以降、静岡県以外の府県とは縁が無いことは分かっているので、神奈川や東京の史料を探しても情報が得られないであろうことは想像していた。それでも調べたのは、前田氏の調査を再検証するのが今回の目的だからである

しかし筆者が調査できた範囲は、悉皆調査を行った静岡県を除くと、神奈川県及び東京府の史料で履歴の情報がある部分に限定される。その他の県については何も調査できていない。前田氏が記す「ほか各県」に該当する全府県の分を調査することは、もとより不可能なことではあるけれども、筆者が行った今回の調査では残念ながら、ここまでが限界であった。そもそも、いかにも多くの史料を調べましたと言わんばかりに、「ほか各県」というような表記をせずに、実際に調べた分だけを正確に記しておいて欲しかったと切に思う。その手間は面倒なことであるけれども、必要な手間のはずである。

№107 の『静岡県近代史研究』（静岡県近代史研究会）は、今日も発行され続けている学術誌である。岡田清直・錠次郎を記すに当たって前田氏が用いたのは、前田氏の本の第3編を出すまでに用いた資料ということになるので、第3編が発行された1997年10月までのものを見ればよいことになる。1997年10月発行の同誌は第23号なので、創刊号からそこまでを調査した。調査はすべて、浜松市立中央図書館の蔵書を用いた。

同誌に共通する書誌情報は、発行者が「静岡県近代史研究会」であること、同会の連絡先として静岡大学の教員（時期によって異なる）の研究室が気付として記されていることである。編者の名は無いが、静岡県近代史研究会の編でよいであろう。以下、発行時期を記すと、創刊号は1979年3月1日、第2号は1979年10月10日、第3号は1980年5月10日、第4号は1980年10月10日、第5号は1981年5月10日、第6号は1981年10月10日、第7号は1982年8月15日、第8号は1982年10月10日、第9号は1983年10月10日、第10号は1984年8月30日、第11号は1985年9月20日、第12号は1986年9月30日、第13号は1987年10月1日、第14号は1988年10月10日、第15号は1989年10月10日、第16号は1990年10月10日、第17号は1991年10月10日、第18号は1992年10月10日、第19号は1993年10月10日、第20号は1994年10月10日、第21号は1995年8月15日、第22号は1996年10月10日、第23号は1997年10月10日である。

このうち第4号所収の川崎司「山路愛山研究―第二の故郷　静岡―」の中に、高木壬太郎が掛川の「岡田清直」の漢学塾で学んだことが紹介されている（69頁）。しかし、この記録は、前田氏の本の中で岡田清直の経歴を記す部分で用いられなかった。そのことは、前掲**№82**の所で述べた通りである。

また、第15号所収の川崎司「高木壬太郎と『呉山一峰』」でも、高木が「掛川村の漢儒（蘭学者とも）・岡田清直の家塾へ」通っていたことが記されている（182頁）が、これも前田氏の本では採用されなかった。このことも前掲**№85**の所で既に紹介している。

以上、『静岡県近代史研究』からは、岡田清直の情報が2件記されていたが、前田氏の本ではいずれも無視されていたことが分かる。また、岡田錠次郎については何も情報がなかった。

№108 の『地方史静岡』（同研究会）は、袋井市立袋井図書館に創刊号から第28号まで（但し第22号は欠号）所蔵されていたので、その全部を確認した。欠号の第22号は浜松市立中央図書館の蔵書を見た。第28号は平成12年（2000年）の発行で、前田氏の本の第3編が刊行された1997年を超えているので、必要な調査範囲は全てカバーできている。

同誌の正確な書誌情報を記すと、創刊号から第 9 号までは編集が静岡県立中央図書館資料課、発行が静岡県立中央図書館であり、第 10 号～15 号までは編集･発行が地方史静岡刊行会で、その事務局が静岡県立中央図書館内に置かれていた。第 16 号以降は全て、編集・発行が地方史静岡刊行会で、その事務局は黒船印刷㈱内となっている。発行時期は創刊号が昭和 46 年 7 月 1 日、第 2 号は昭和 47 年 7 月 1 日、第 3 号は昭和 48 年 8 月 30 日、第 4 号は昭和 49 年 8 月 30 日、第 5 号は昭和 50 年 10 月 1 日、第 6 号は昭和 51 年 11 月 30 日、第 7 号は昭和 52 年 11 月 30 日、第 8 号は昭和 53 年 11 月 30 日、第 9 号は昭和 54 年 11 月 30 日、第 10 号は昭和 56 年 12 月 25 日、第 11 号は昭和 58 年 3 月 1 日、第 12 号は昭和 59 年 3 月 21 日、第 13 号は昭和 60 年 3 月 21 日、第 14 号は昭和 61 年 3 月 25 日、第 15 号は昭和 62 年 3 月 25 日、第 16 号は昭和 63 年 3 月 31 日、第 17 号は平成元年 3 月 31 日、第 18 号は平成 2 年 3 月 31 日、第 19 号は平成 3 年 3 月 31 日、第 20 号は平成 4 年 4 月 20 日、第 21 号は平成 5 年 5 月 10 日、第 22 号は平成 6 年 3 月 25 日、第 23 号は平成 7 年 3 月 27 日、第 24 号は平成 8 年 3 月 27 日、第 25 号は平成 9 年 5 月 31 日、第 26 号は平成 10 年 3 月 31 日、第 27 号は平成 11 年 3 月 31 日、第 28 号は平成 12 年 3 月 15 日である。

以上の全てにおいて、岡田清直・錠次郎の情報は何もなかった。

№109 の『沼津史談会』（同研究会）については、前田氏が記す名の文献は存在しない。氏が書名を間違えているのである。実在するのは**『沼津史談』**である。これについて筆者は、創刊号から第 3 号までは沼津市立図書館で、第 4 号から第 7 号までは浜松市立中央図書館で、第 8 号から第 14 号までは浜松市立浜北図書館で、第 15 号から第 27 号までは袋井市立袋井図書館で、第 28 号は沼津市立図書館で、第 29 号から第 31 号は袋井市立袋井図書館で、第 32 号から第 48 号までは沼津市立図書館で確認した。第 48 号以降も発行されているが、それ以降は除外して、この号までで区切ったのは、既述の通り、岡田のことを記した前田氏の本が第 3 編（1997 年＝平成 9 年刊）までだからである。同年発行の第 48 号までを見れば、前田氏が岡田のことを調べるに当たって用いたはずの資料は全てカバーできる。従って、第 48 号を調査対象の最後とした。

同誌の正確な書誌情報を記すと、奥付に記された「発行者」名は「**沼津郷土史研究談話会**」であり、前田氏が記す「研究会」の文字はどこにもない。そこも氏は誤記していることになる。第 28 号以降の「発行所」は「**沼津史談会**」と短くなっているが、やはり「研究会」ではない。また第 38 号以降の「発行所」（第 42 号以降は「発行責任者」に変更）は、その時々の史談会会長の個人名になっている。

発行時期は、創刊号が昭和 37 年 8 月 22 日、第 2 号は昭和 39 年 3 月 31 日、第 3 号は昭和 40 年 3 月 30 日、第 4 号は昭和 41 年 3 月 31 日、第 5 号は昭和 42 年 3 月 31 日、第 6 号は昭和 43 年 2 月 17 日、第 7 号は昭和 43 年 3 月 31 日、第 8 号は昭和 44 年 3 月 31 日、第 9 号は昭和 45 年 3 月 3 日、第 10 号は昭和 46 年 3 月 31 日、第 11 号は昭和 47 年 3 月 31 日、第 12 号は昭和 47 年 11 月 25 日、第 13 号は昭和 48 年 3 月 13 日、第 14 号は昭和 49 年 2 月 10 日、第 15 号は昭和 49 年 3 月 30 日、第 16 号は昭和 50 年 1 月 31 日、第 17 号は昭和 50 年 3 月 30 日、第 18 号は昭和 50 年 11 月 30 日、第 19 号は昭和 51 年 3 月 30 日、第 20 号は昭和 52 年 1 月（日にちの記載はない。以下、月だけの表示のものは同じ理由による）、第 21 号は昭和 52 年 6 月、第 22 号は昭和 52 年 11 月 30 日、第 23 号は昭和 53 年 6 月 20 日、第 24 号は昭和 53 年 11 月、第 25 号は昭和 54 年 4 月、第 26 号は昭和 54 年 11 月、第 27 号は昭和 55 年 4 月、第 28 号は昭和 55 年 11 月 30 日、第 29 号は昭和 56 年 5 月、第 30 号は昭和 56 年 12 月、第 31 号は昭和 57 年 6 月、第 32 号は昭和 57 年 12 月である。第 33 号は、奥付では昭和 57 年 6 月 30 日となっているが、同誌の奥付の次頁から始まる附録「「沼津史談」綜合目録」の 1 枚目表紙の右肩には「昭和五十八年六月刊」とある。本編と附録で発行時期の記載が異なるはずはないし、また第 32 号の発行が昭和 57 年 12 月なのに、次の第 33 号がそれより半年早い昭和 57 年 6 月 30 日では不自然である。それ故、第 33 号の発行年は昭和 58 年が正しいと推断できる。なお、次の第 34 号は昭和 59 年 3 月 31 日であり、ここからも、1 つ前の第 33 号が昭和 58 年の刊行であることは妥当であると言える。第 35 号は昭和 59 年 11 月 20 日、第 36 号は昭和 60 年 4 月 30 日、第 37 号は昭和 61 年 3 月 31 日、第 38 号は昭和 62 年 3 月 31 日、第 39 号は昭和 63 年 3 月 31 日、第 40 号は平成元年 3 月 31 日、第 41 号は平成 2 年 3 月 31 日、第 42 号は平成 3 年 6 月 18 日、第 43 号は平成 4 年 5 月 10 日、第 44 号は平成 5 年 5 月 25 日、第 45 号は平成 6 年 5 月 15 日、第 46 号は平成 7 年 3 月 31 日、第 47 号は平成 8 年 4 月 30 日、第 48 号は平成 9 年 3 月 31 日である。ちなみに第 49 号は平成 10 年 3 月 31 日であり、前田氏の本の第 3 編よりも後の発行となる。

以上のうち、第 3 号所収の「沼津御役人附」の中に沼津勤番組「十一番頻」の世話役として岡田孝三が、また第 8 号の 58 頁に岡田信之助が、第 28 号の 52～53 頁に君沢郡田方郡郡長兼町村立中学伊豆学校長の岡田直臣が、第 33 号では明治 23 年の衆院選選挙人名簿中に沼津町の岡田栄太郎（43 頁）と金岡村の岡田金吾・岡田芳郎・岡田善六（46 頁）が、また安政年間の文書中に出てくる野馬方御役人の岡田七平（92 頁）が、第 34 号では沼津の岡藤ガラス店の前社長の岡田良二（21 頁）と別に岡田伊之助（74 頁）が記載されていた。更に、第 37 号では沼津中学校の教師・岡田正（63 頁）、君沢・田方郡長の岡田直臣（75 頁）が、第 43 号では岡田盈哉・岡田善七（共に 122 頁）、及び岡田かめ・岡田梶太郎（共に 152 頁）が、第 45 号では明治 41

年の文書中にある岡田善六（34 頁）があった。岡田姓の人物は以上であり、岡田清直・錠次郎の情報はなかった。

№110 の『磐南文化』（同研究会）は、創刊号から第 30 号までは袋井市立袋井図書館で、第 31 号から第 44 号までは浜松市立中央図書館で確認した。第 44 号は筆者が同誌の調査をしていた時の最新号（2018 年刊）であり、そこまでの全部を対象とすれば、前田氏が第 3 編（1997 年刊）を発行するまでに資料として用いた時期は全てカバーできるのは確実なので、そのようにした。同誌は今日も発行が続けられており、当地域では有名な雑誌である。

同誌の発行元は、創刊号のみは磐南文化協会設立準備会であるが、第 2 号からは**磐南文化協会**で一貫している。第 18 号以降は同協会の事務局は旧見付学校内となっている。「編集人」は創刊号では「磐南文化」編集部となっているが、第 2 号以降は編集委員会の代表者個人の名が記され、第 18 号からはその肩書きが「編集兼発行人」になっている。いずれにしても磐南文化協会関係者によるものであるから、第 10 号以下の表紙下部に記されているように「編集･発行　磐南文化協会」として理解しておいて良いであろう。なお、前田氏はこの文献についても発行母体の名に「研究会」の文字を使っているが、そのような文字は一度も使われていないので、ここでも表記を誤っている。

発行時期は創刊号が昭和 52 年 10 月（日にちの記載はない）で、第 2 号は昭和 53 年 6 月 20 日、第 3 号は昭和 54 年 2 月 18 日、第 4 号は昭和 54 年 9 月 20 日、第 5 号は昭和 55 年 3 月 20 日、第 6 号は昭和 56 年 3 月 20 日、第 7 号は昭和 56 年 11 月 20 日、第 8 号は昭和 57 年 6 月 1 日、第 9 号は昭和 58 年 3 月 31 日、第 10 号は昭和 59 年 3 月 31 日、第 11 号は昭和 60 年 3 月 31 日、第 12 号は昭和 61 年 7 月 1 日、第 13 号は昭和 62 年 3 月 5 日、第 14 号は昭和 63 年 5 月 1 日、第 15 号は平成元年（裏表紙にある発行年月日のうち月日の部分が図書館の登録シールで覆われており確認できなかった）、第 16 号は平成 2 年（同上）、第 17 号は平成 3 年 1 月 30 日、第 18 号は平成 4 年 3 月 1 日、第 19 号は平成 5 年 3 月 15 日、第 20 号は平成 6 年 3 月 10 日、第 21 号は平成 7 年 3 月 10 日、第 22 号は平成 8 年 3 月 10 日、第 23 号は平成 9 年 3 月 10 日、第 24 号は平成 10 年（同じくシールで月日は確認できず）、第 25 号は平成 11 年 3 月 10 日、第 26 号は平成 12 年 3 月 10 日、第 27 号は平成 13 年（同じくシールで月日は確認できず）、第 28 号は平成 14 年 3 月 10 日、第 29 号は平成 15 年 3 月 10 日、第 30 号は平成 16 年 3 月 10 日、第 31 号は平成 17 年 3 月 1 日、第 32 号は平成 18 年 3 月 1 日、第 33 号は平成 19 年 3 月 1 日、第 34 号は平成 20 年 3 月 1 日、第 35 号は平成 21 年 3 月 1 日、第 36 号は平成 22 年 3 月 1 日、第 37 号は平成 23 年 3 月 1 日、第 38 号は平成 24 年 3 月 1 日、第 39 号は平成 25 年 3 月 1 日、第 40 号は平成 26 年 3 月 1 日、第 41 号は平成 27 年 3 月 1 日、第 42 号は平成 28 年 3 月 1 日、第 43 号は平成 29 年 3 月 1 日、第 44 号は平成 30 年 3 月 1 日である。

以上のうち、第 5 号に岡田佐平治（17 頁）と岡田良一郎（18 頁以下）が、第 7 号に掛川協会の幹事・岡田晋（88 頁）が、第 11 号に岡田首相（21 頁）が、第 21 号に俳句の作者としての岡田寿翁・岡田素翁が、第 23 号に岡田良一郎が、第 26 号に岡田貞一が、第 27 号に文相の岡田良平、岡田佐平治、岡田良一郎が、第 29 号に土木局長の岡田文秀（5 頁）が、第 42 号に岡田良平（13 頁）が、第 43 号に岡田良平（4～5 頁）、岡田良一郎（6 頁）があったが、岡田清直・錠次郎の名はどこにもなかった。

№111 の『明治史料館通信』（沼津市明治史料館）は、浜松市立中央図書館の蔵書を確認した。これも今日でも発行され続けている両面印刷 1 枚物 2 つ折りのパンフである。筆者は、創刊号から第 51 号（全て通号で示す）までを調べた。第 51 号は 1997 年の最後の発行号であり、前田氏の本の第 3 編の刊行年と同じ 1997 年の最後の発行号までを対象とした。

現物に記されている正しいタイトルは『沼津市／明治史料館通信』（「／」は改行を示し、小栗が付したもの）であり、沼津市明治史料館自身も『沼津市明治史料館通信』と記している（同館 HP を参照）。しかし、沼津市立図書館に登録されている名称は『明治史料館通信』であるから、前田氏が用いた表記も間違いとはいえない。沼津市明治史料館の編集･発行によるものである。

発行時期は、創刊号が 1985 年 4 月 25 日、第 2 号は同年 7 月 25 日、第 3 号は同年 10 月 25 日、第 4 号は 1986 年 1 月 25 日、第 5 号は同年 4 月 25 日、第 6 号は同年 7 月 25 日、第 7 号は同年 10 月 25 日、第 8 号は 1987 年 1 月 25 日、第 9 号は同年 4 月 25 日、第 10 号は同年 7 月 25 日、第 11 号は同年 10 月 25 日、第 12 号は 1988 年 1 月 25 日、第 13 号は同年 4 月 25 日、第 14 号は同年 7 月 25 日、第 15 号は同年 10 月 25 日、第 16 号は 1989 年 1 月 25 日、第 17 号は同年 4 月 25 日、第 18 号は同年 7 月 25 日、第 19 号は同年 10 月 25 日、第 20 号は 1990 年 1 月 25 日、第 21 号は同年 4 月 25 日、第 22 号は同年 7 月 25 日、第 23 号は同年 10 月 25 日、第 24 号は 1991 年 1 月 25 日、第 25 号は同年 4 月 25 日、第 26 号は同年 7 月 25 日、第 27 号は同年 10 月 25 日、第 28 号は 1992 年 1 月 25 日、第 29 号は同年 4 月 25 日、第 30 号は同年 7 月 25 日、第 31 号は同年 10 月 25 日、第 32 号は 1993 年 1 月 25 日、第 33 号は同年 4 月 25 日、第 34 号は同年 7 月 25 日、第 35 号は同年 10 月 25 日、第 36 号は 1994 年 1 月 25 日、第 37 号は同年 4 月 25 日、第 38 号は同年 7 月 25 日、第 39 号は同年 10 月 25 日、第 40 号は 1995 年 1 月 25 日、第 41 号は同年 4 月 25 日、第 42 号は同年 7 月 25 日、第 43 号は同年 10 月 25 日、第 44 号は 1996 年 1 月 25 日、第 45 号は同年 4 月 25 日、第 46 号は同年 7 月 25 日、第 47 号は同年 10 月 25 日、第

48 号は 1997 年 1 月 25 日、第 49 号は同年 4 月 25 日、第 50 号は同年 7 月 25 日、第 51 号は同年 10 月 25 日である。

これらの中に岡田清直・錠次郎の情報は何もなかった。

No.112 の『静岡藩始末記』（昭和 50 年、三枝康高著）は、袋井市立袋井図書館の蔵書を確認した。正確な書誌情報は三枝康高『静岡藩始末記　―大政奉還後の徳川家』（昭和 50 年 4 月 15 日、新人物往来社）で、副題が付いている。

本書所収の「静岡学問所教授一覧表」の中に、明治 2 年正月の五等教授・岡田主税と、明治 2 年 9 月の五等教授・「漢　岡田深蔵」（別名「主税」）（共に 189 頁）があり、また同様に所収されている資料「牧之原開拓士族移住所別氏名」中に、岡田忠勧（222 頁）と岡田秀民（224 頁）があったが、岡田姓の人物は以上で、岡田清直・錠次郎の情報はなかった。

なお、本書の 222～224 頁に収録されている「牧之原開拓士族移住所別氏名」のリストは、表中の説明書きによると、①「牧之原開拓士族名簿」（金谷町役場所蔵）、②「開拓士族初倉村移住者戸籍」（島田市役所々蔵）、③「牧之原開拓記念碑」（榛原郡榛原町庄内原）の３つの資料を用いて作成されている。このうち①は前出の**No.43** の資料と同一名のものである。但し、**No.43** の資料は金谷郷土史研究会がまとめたものであることは判明しているが、同研究会が用いた原資料が金谷町役場所蔵のものであるかは何も記載がないので分からない。また、**No.43** の資料からは既述の通り、岡田秀民／為八が確認できるが、この**No.112** 所収の「牧之原開拓士族移住所別氏名」でも彼の名を確認できる。更に前出**No.44** の資料からは岡田忠勧が確認できたが、**No.112** 所収の「牧之原開拓士族移住所別氏名」でも彼の名を確認できる。但し、岡田清直・錠次郎とは別人なので、本研究では無視してもよい情報である。

ところで、この**No.112** 所収の「牧之原開拓士族移住所別氏名」には、「『島田市史』より」という小さな文字のクレジットが表中に記されている。そこで、同表を作成する際に用いた①～③の資料が『島田市史』(上中下)または『島田市史資料』（第 1～6 巻)に収録されていると考え、島田市史関連の全 9 冊を調べてみた。調査した場所は袋井市立袋井図書館と浜松市立中央図書館である。すると、『島田市史　下巻』（昭和 48 年 3 月 30 日、島田市史編纂委員会編、島田市役所刊行)の 91～93 頁に、**No.112** 所収の「牧之原開拓士族移住所別氏名」と全く同じリストが掲載されている。違うのは「『島田市史』より」の文字がないことだけである。つまり、**No.112** の著者は「『島田市史』より」の文字を入れて、『島田市史　下巻』にある表をそのまま転載しているだけであった。**No.112** の著者は、恐らく自分自身で①～③の原資料を見ていないのである。また、①～③の原資料が『島田市史』全 3 巻または『島田市史資料』全 6 巻のどこかに収録されているのかといえば、それらはどこにもなかった。従って、「『島田市史』より」という断り書きは、そこで作成されていた表をそのまま写しました、という意味であることが分かる。自ら原資料から調査し直す手間を省き、しかも参考にした文献のどこをどのように利用したかを丁寧に記すことがないのは、決して前田氏だけではないことが分かる。無論、手間を省き、他者の成果を利用すること自体は構わないのであるが、説明はもっと丁寧であってもよいのではないかと思う。

No.113 の『御注進書綴込』（韮山御役所）は、静岡県立中央図書館の蔵書を確認した。同図書館の登録情報では『慶応四年御注進書綴入　豆州下田町』として登録されており、検索でもこの書名でヒットするが、実物を見ると、このような書名は製本版の冊子の背文字に入っているのみである。但し、背文字部分は正しくは『慶応四年　御注進書綴込　豆州下田町』とあり、「込」の文字が使われている。また扉の部分にもペン書きで「慶應四年／御注進書綴込／辰」（「／」は小栗が付したもので、改行を意味する）と書かれている。従って、前田氏が記すタイトルでも問題はないと言える。なお、前田氏が記すような「韮山御役所」の文字は、図書館の登録情報の中には存在しないので検索で用いても意味がないのだが、本文の中には散見される文字である。

この資料自体は全てコピーしたものを冊子にまとめた形で閲覧に供されている。全体は、前半に原資料の「要目」をペン書きでまとめた部分と、後半に毛筆で書かれた元の原文の部分の 2 部構成になっている。後半の原文の冒頭に置かれた文書を見ると、文書の末尾に宛名として「韮山／御役所」（「／」は小栗が付したもので、改行を意味する）とあり、差出人は「豆州下田町」の年寄 2 人と名主 1 人による 3 人の連名になっている。以下、同じ組み合わせの文書が続いている。これらの内容から、豆州下田町の住民から「韮山御役所」に届けられた「御注進書綴込」であると読み取って、前田氏は書誌情報を冒頭のように書きこんだと解釈すると理解ができる。

但し、本文の後半の方には、「韮山県御役所」と記された文書も見られる。「韮山県」は明治の廃藩置県で置かれたものであるから、図書館登録情報や背文字タイトルに使われた「慶応四年」とは無縁の文書のはずである。従って、収録されている文書の実態と資料名とが必ずしも合致していないことになる。

毛筆の崩し字を読むのが苦手な筆者ではあるが、この資料を全て見たところ、岡田清直・錠次郎の情報は何も見出せなかった。時期と場所から考えても、岡田とは縁のない文書と推察はできていた。

No.114 の『小伝林鶴梁』（坂口筑母著）は、浜松市立中央図書館の蔵書を見た。林鶴梁は幕臣であった人物で、その小伝が本書である。実物は『小伝林鶴梁　一』『小伝林鶴梁　二』『小伝林鶴梁　三』の全 3 巻で構成されている

が、前田氏の記録からはそのようなことは分からない。第1巻の裏表紙に「全三巻」とも記されている。

奥付に相当するものがないが、「一」の冒頭に置かれた森銑三の序文に昭和53年6月とあること、同書の裏表紙に「昭和戊午八月二十日」とあること、昭和の戊午は昭和53年であることから、この第1巻は昭和53年8月20日の発行と考えられる。同様に、第2巻裏表紙に「昭和巳未年四月三十日」(昭和54年)、第3巻裏表紙に「昭和庚申歳八月一日」(昭和55年)とあるのが発行日と考えられる。また、全ての裏表紙に「著者兼発行者坂口筑母」、「製作・個人社」と記されていることから、坂口による私家版の本であると分かる。更に、浜松市立中央図書館の蔵書には第3巻を除き、第1巻第2巻の末尾に著者による謄写版刷りの「人名索引」が貼付されていた。

これらの全てを見たが、岡田清直・錠次郎の情報は何もなかった。

№115の『静岡県紳士録』(大正5年、中尾栄次郎著)は国立国会図書館のデジタルコレクションに蔵書があり、それをWEBで確認した。奥付から正しい書誌情報を記すと、中尾栄次郎『静岡県紳士録』(大正5年7月8日、発行兼印刷者・三枝伊三郎、印刷所発行所・静岡栄一社)となる。表紙にのみ「中尾栄次郎**編著**」と記されている。

本書には539頁に江尻商界の人材として岡田金次が紹介されているが、他に岡田姓の人物はなく、岡田清直・錠次郎の情報はなかった。

№116の『東京掃苔録』(日本史籍協会)は、静岡理工科大学附属図書館より相互貸借制度を利用して、和歌山大学附属図書館の蔵書を取り寄せてもらい、それで確認した。本書の奥付から書誌情報を記すと、『東京掃苔録』(日本史籍協会編集、東京大学出版会発行、昭和15年5月15日発行昭和57年9月30日覆刻)となる。復刻版である。前田氏も「日本史籍協会」の文字を記しているので、同じ復刻版を見たことになる。底本は、収録されている原書の奥付から、**藤浪和子**著『東京掃苔録』(昭和15年5月15日、**東京名墓顕彰会**)と分かる。東京のどのお寺にどのような著名人の墓があるか等を紹介する本である。ここにも岡田清直・錠次郎の情報はなかった。

(9) 小栗勝也「明治末期の自助精神と遠州報徳運動」(袋井市文化協会・袋井市教育委員会『袋井文芸』第29号、平成13年3月1日、所収)を参照。

(2021年2月26日提出。閲読者の指摘を受け微修正した原稿を5月11日に再提出。本誌次年度掲載の(その5)に続く)